

現代日本の消費文化に関する一考察

A Study on the Consumption Culture of modern Japan

福 田 優 二

Yuji FUKUDA

現代日本の消費文化に関する一考察

福田 優 二

要 旨

現代日本の消費文化は“クール・ジャパン”と評され、海外からも称讃されるようになった。この小論は、評価の高まりつつある現代日本の消費文化を、どのように位置づけることが可能なのか、文明史的な視点から考察を試みるものである。サミュエル・ハンチントン「文明の衝突」の中で、現存する世界の主要文明は、七ないし八であるとし、「日本文明」はその一つであると言明した。多くの研究者が日本文明を固有の文明であると認識し、西暦100年～400年頃の時期に中国文明から派生し成立したと見ているからである。日本文明は主要文明の中で唯一、一国家一文明という特徴を持ち、文化の継続性という点できわめてユニークな存在である。この特異性を考えると、日本文明の創世期と最初の大きな文化的達成の時期に、その本質は自ずと現れていると見るべきであろう。その意味で、最初に国家としての自己確認を行い、日本社会の指針を示した聖徳太子の「和」のコンセプトや、「源氏物語」や藤原道長のライフスタイルを頂点とする平安貴族の快樂主義的な自己実現の生き方は示唆的である。平安京というインフラと荘園を背景とする経済力によって、平安貴族コミュニティは「文化消費の共同体」として稀有な達成を示した。この時代、「和」の精神、「桜」の美というシンボルによって、日本文明の本質が示されたのである。一方、鎌倉時代以降、二次大戦終結までは、「武」の精神、「刀」の時代となった。明治維新も「富国強兵」に表現されたように、その本質は旧武士の「武」のモラルに基づく「士族国家」への転位であった。大戦後の日本では「武-刀」の全面否定への大転換が起こり、「和-桜」の復活となった。「和」の精神を基盤とした、平安貴族モデルへの回帰こそが戦後世代のライフスタイルと価値観となった。“クール・ジャパン”という現代日本の消費文化への賛美は日本文明の伝統を踏まえた優美と洗練へのリスペクトなのである。

はじめに

戦後、ベストセラーとなった「菊と刀」[1946, 邦訳 1948]の中で、人類学者ルース・ベネディクトは日本人の二面性を強調して、唯美主義的傾向（菊）と武士道精神（刀）の並存などを「日本文化の型」の特徴とした。

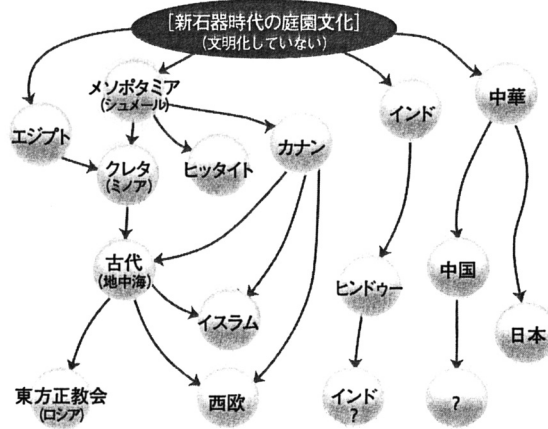
現代日本の消費文化は“クール・ジャパン”と評され海外からも評価、称讃され始めているが、「戦後日本の文化の型」とでも言うべきものを考察することによって、現代日本の消費文化の本質的特徴を分析し、以って、これからの日本の消費経済の可能性を考える一助としたい。

1. 「日本文明」の形成

サミュエル・ハンチントン [1996] は「文明の衝突」において、現存する主要な文明を分析し、「日本文明」は七、ないし八の主要な文明のうちの一つであると述べている。古代中国の文明から派生し、西暦 100 年ないし 400 年の時期に現れたとしている。因みに、ハンチントンの言う現代の主要文明は以下のとおりである。

- ・ 中華文明：紀元前 1500 ～ 2500 年頃から中国に生まれる。東南アジアなどの中国人社会の文化、ベトナム、朝鮮の文化が含まれる。
- ・ 日本文明：一部の学者は日本の文化と中国の文化を極東文明とひとくくりにするが、ほとんどの学者は日本のそれを固有の文明と認識し、中国文明から派生し、西暦 100 年ないし、400 年の時期にあらわれたと見ている。
- ・ ヒンドゥー文明：インド亜大陸に少なくとも紀元前 1500 年頃から存在した。ヒンドゥー教を核とし、国を超えて広がっている。
- ・ イスラム文明：西暦 7 世紀にアラビア半島に端を発したイスラム教を中心とする文明であり、アラビア、トルコ、バルシア、マレーなど数多くの下位文明が存在する。
- ・ 東方正教会文明：ロシアを中心として、ビザンチン文明を親とする文明で、西欧のキリスト教文明と明らかに異なる宗教を特徴とする。
- ・ 西欧文明：西暦 700 年ないし 800 年にあらわれたとされる。一般に学者たちは、そこにヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカの三つ主要な構成要素があると見ている。
- ・ ラテンアメリカ文明：ハンチントンはラテンアメリカ文明を西欧文明と区別する。ヨーロッパ文明から生まれたが土着文化と混じり合い独自の展開をしたためである。
- ・ (アフリカ文明)：カッコつきの文明。南アフリカを中核国家として、サハラ以南のアフリカが固有の文明にまとまる可能性が考えられる。

図1 主要文明の系統図(東半球の文明)



出典：Carroll Quigley, *The Evolution of Civilizations : An Introduction to Historical Analysis* (Indianapolis : Liberty Press, 2nd ed., 1979), p.83.
(サミュエル・ハンチントン[2000]より)

主要文明の系統図(図1)にあるように日本文明は中華文明から早い段階で派生し、一国家一文明の歴史的な一貫性が特徴である。一般的に、文明を構成する政治的な要素は文明によって異なり、様々である。文明と政治的まとまりが一致するケースでも、中国は「一つの国を装っている文明」(ルシアン・パイ [1990])であるのに対し、日本の場合、国すなわち文明であるのが特徴である。

現存する七、ないし八の世界の主要な文明の一つである日本文明は、中華文明、ヒन्दウー文明に次いで成立年代が古い。また、一国家一文明で、政治単位も一貫性があり文化の継続性が高い。現存する主要な文明の中で、最も文化の正統性を主張できる文明であるといえる。

具体的に、日本文明の形成期から日本の最初の文化的なピークである平安貴族文化の形成に至る重要事項をピックアップすると以下になる。

- ・ 285年……漢字が伝わる
- ・ 350年……このころ大和朝廷による日本統一
- ・ 538年……百済から仏教伝来
- ・ 574年……聖徳太子誕生
- ・ 593年……聖徳太子、摂政となる
- ・ 604年……聖徳太子、「十七条憲法」を制定
- ・ 607年……小野妹子、遣隋使として国書

「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」

- ・ 607年……法隆寺建設(現存する世界最古の木造建築)
- ・ 645年……大化の改新

- ・ 712年……「古事記」成る
- ・ 720年……「日本書紀」成る
- ・ 759年……「万葉集」成る
- ・ 794年……平安京遷都
- ・ 894年……遣唐使廃止
- ・ 905年……「古今和歌集」成る
- ・ 995年……藤原道長，右大臣となり権勢
- ・ 1008年……「源氏物語」このころ成る
- ・ 1053年……宇治「平等院鳳凰堂」成る
- ・ 1067年……平清盛，武士として初めて太政大臣となる
- ・ 1192年……鎌倉幕府成立
- ・ 1205年……「新古今和歌集」成る

「日本文明」の形成される頃，漢字が伝来し，やがて，仏教が伝わる。聖徳太子は仏教に深く帰依したが，儒教や，日本古来の神道も尊重した。折衷型発想のルーツとも言える。また，「国書」で中国と対等外交を試みるなど，「日本文明」の実体を明確な形で歴史に刻印した最初の人物と言える。史実に関しては異論が多いが，そうだとすれば，太子の業績が多く書かれた日本書紀が成立したころには，聖徳太子というカリスマを通して，「日本文明」の自覚を広く表明する意識が高まっていたと言えよう。

奈良時代まで，事あるごとに都は移されたが，794年に平安京遷都が桓武天皇によって行われたことは特筆に価する。平安京は，言うまでもなく，今日に至る京都文化のインフラとなったからである。

2. 平安貴族社会に日本文化の原型

日本文明は2～5世紀に生成し，6～7世紀，聖徳太子の治世下には国家としてのアイデンティティを確立した。そして，8世紀末の794年に貴族文化コミュニティの基盤となる土地としての平安京が開かれた。平安京は，長安をモデルとする計画的な造成による十分なスペース，四季の変化の感じられる豊かな自然の要素などに留意してデザインされた。結果として，1200年を超えて平安京，京都は日本の文化の中心地の一つであり続けている。

文化の形成には平和と経済的安定が不可欠である。平安時代は，日本が国家としての自覚を深め，天皇を中心とする中央集権が確立し，政治的にも安定した時代だった。経済的には，墾田永代私有法などによって，いわばフロンティアの開発が進んだ。藤原摂関家をはじめとする

有力貴族は「荘園」としてこれら私有地に基づく富の蓄積を図った。

さらに、894年の遣唐使廃止は「国風文化」の醸成を促進した。その意味で、平安時代こそ、日本文明の最初の文化的黄金期であり、日本文化の原型なのである。つまり、平安文化は中国文化の影響を経て形成されたが、日本文明のポテンシャルが徹底的に試されたという意味で、日本文明の本質を探る上で極めて重要な意味を持っているのである。

平安文化は日本の最初の文化的ピークであるというだけでなく、政治・経済・文化の担い手が貴族階級に集中し、いわば純粹培養とも言うべき文化的実験が行われたと見ることができよう。

言うまでもなく、平安文化の最高の達成の一つは「源氏物語」である。2008年には源氏物語完成後千年を記念する特集が各種メディアで編まれたが、世界最古の長編恋愛小説としての評価はすでに確立されている。

源氏物語は平安貴族のライフスタイルを反映した物語であるが、男女の自由な恋愛感情を軸とするストーリーは、ある意味で普遍的であり、今日なお、新鮮な輝きを失っていない。実際、現代の若者たちの生活感情につながる面も少なくない。

そして、平安文化で、もう一つ重要なのは「古今和歌集」から「新古今和歌集」にいたる300年の和歌の黄金時代である。新古今の成立は鎌倉時代に入ってからだが、やはり、「古今」～「新古今」は平安文化のエッセンスであると断言できよう。無論、和歌の源流は「万葉集」にある。万葉集が真実を歌っているのに対し、平安期の和歌は技巧に堕しているという批判もある。技術に走りすぎているという作品が見られる一面は否定できないが、成熟した時代におけるコミュニケーションのあり方という意味で、平安時代の和歌をめぐるスタイルは示唆的である。均質的なコミュニティにおけるコミュニケーションとして、短歌は究極の表現形式を示している。「本歌取り」「懸詞」などの技巧を凝らしながら、「歌合せ」が頻繁に開催された。このような情熱は今日の消費文化の中に、別の形で生きている。これについては、後段で触れたい。

平安文化は、文学のみならず、平等院鳳凰堂(1053 建立)など日本流の優美さを湛える建築物や、源氏物語絵巻などの美術品でも高度の達成を示した。これらの背景には、藤原道長を頂点とする貴族階級のコミュニティにおいて権力と感受性が高いレベルで一致したという背景がある。たとえば、宇治殿と呼ばれた、宇治平等院はもともと藤原道長の別荘であり、貴族コミュニティの社交の場でもあったのである。

平安時代は、日本の青春期であり、「平安文化」は日本文明の生んだ処女作品集とも言える。「源氏物語」は作品集のなかの最高傑作、ベストヒットナンバーなのである。

平安京という素晴らしいインフラと「荘園」を背景とする藤原一族らの圧倒的な経済力によって、平安貴族コミュニティは「文化消費の共同体」として世界史的にも稀に見る成果をあげ、今なお、古都・京都は日本文化の再生産の基盤として機能している。そのこと自体が「日本文明」

の大きな資産なのである。

ルース・ベネディクトは日本文明の優美さを皇室のシンボルでもある「菊」によって象徴したが、言うまでもなく、それは、「桜」でなければならない。

「またやみむ かたののみのの桜狩り 花の雪散る 春のあけぼの」 藤原俊成

3. 「刀」の時代

しかし、やがて、貴族階級は歴史の表舞台から後退する。1067年、武士として初めて太政大臣の位についた平清盛は貴族的側面があり、美しい夕陽の沈む宮島の鳥居をデザインしたことでも有名であったが、1192年に東国の鎌倉に幕府を開いた源頼朝はストイックな軍師であり、ここを以って、日本は「桜」の優美さを基調とする時代から、「刀」のストイシズムを基調とする時代に転換する。

鎌倉時代以降、政治権力は基本的に武士階級が握り続けた。明治維新によって、武士も権力の座から降りるが、維新後の実権は旧下級武士の出身者が握り、実態として「士族国家」となった。「富国強兵」というスローガンに見られるように、「武」のモラルは健在であり、太平洋戦争の敗戦で軍部独裁政権が破綻するまで、鎌倉幕府成立（1192年）から終戦の1945年まで、約750年間、「刀」の時代が続いたのである。

「桜」の優美さを基調とする時代の始まりを「和をもって尊し」とした聖徳太子が摂政となった593年から始まると見れば、鎌倉幕府成立まで、599年、約600年間続いたことになる。「日本文明」は国家としてのアイデンティティを確立してから、600年の優美さを基調とする「桜」の時代、750年のストイシズムを基調とする「刀」の時代を経て「終戦」を迎えたのである。

4. 「平安貴族モデル」に回帰した現代の消費文化

さて、戦後日本の基本ルールとなった「日本国憲法」の最大の特徴は「平和主義」であり、「戦争の放棄」である。これは、言うまでもなく、「刀」のモラルの全否定であり、日本人の価値観の大転換を促した。誤解を恐れずに言えば、「日本国憲法」の基本理念は「和をもって尊し」とした聖徳太子の唱えた「日本文明」の根本哲学への回帰と見られなくもない。

高度成長期の時代、「独身貴族」という言葉が流行したが、これは偶然ではない。貴族のライフスタイルこそ、戦後世代の基本原則となったのである。「バブル」の時代の贅沢志向は平安絶頂期の貴族のライフスタイルを大衆社会の全員参加型で行った歴史的トライアルだったようにも見える。

以下、「平安モデル」回帰のあらわれと見られる事象を点描してみることにする。

・「カラオケ」は現代の「歌合せ」

シャイといわれてきた日本人が明らかに変わってきたのは「カラオケブーム」からである。カラオケが登場したのは70年代である。当初は中年ビジネスマンの演歌中心で、憂さ晴らしのダサイイメージだったが、瞬く間に若者の間に広がり最新のJポップがカラオケ・ナンバーの中心になっていく。

カラオケは若者を中心に幅広く、仲間が集まって「自己表現を競う場」となった。オリジナル曲ではないが、気に入った曲を競って表現する。楽曲の選択と表現を通して「感性」比べをしているのであって、平安時代の「歌合せ」に通じるものがある。

何よりも、シャイな日本人が「マイクを握ったら放さない」目立ちたがりに変身したという事実は、日本人の人間像そのものが「平安還り」しつつあるのではないかと考えさせるものがある。

因みに、カラオケで歌われるナンバーの中には、「桜」(コブクロ)、「さくら」(森山直太朗)、「桜坂」(福山雅治)など、桜をタイトルに含む曲が目白押しで、桜に託して繊細な感情を歌い上げる日本人の心は普遍的であり、古今、新古今の歌のイメージに重なる部分も少なくない。

・ケータイメールは短歌型コミュニケーション

カラオケに次いで、日本で突出して広がった消費文化スタイルとなったものに、ケータイメールがある。このケータイメールは、パソコンのEメールのシステムから、内容的に見て、一つの転位があった。

それは、絵文字の登場である。表意文字である漢字は、もともと画面の小さいケータイでは、アルファベットより視認するうえで優位であったが、絵文字によって、さらに凝縮した表現が可能となった。絵文字はイメージが豊かであり、文字を超えた意味内容のコミュニケーションが可能である。

平安時代の「歌」のやり取りと「ケータイメール」の交換はかなり近い部分がある。絵文字や顔文字などを工夫し、駆使して交わされるコミュニケーションは、様々な技巧を凝らして、限られた字数の中でセンスを表現した歌の交換とモチベーションとしてきわめて近いのではなかろうか。

・キムタクは現代の光源氏？

「源氏物語」は平安文化のエッセンスともいえる。源氏物語の特徴は自由奔放な恋愛が肯定的に描かれ、「抱かれない男」ナンバーワンとしての光源氏が主人公となっていることである。

自由奔放な恋愛は、まさに今日の若者のライフスタイルの基調である。少なくとも、意識・価値観のレベルではそうなっていると見てよいであろう。現実には結婚式場では、「デキ婚」が多数派になりかねない勢いである。

5. 「クール・ジャパン」への戦略的視点

2008年は歴史的に記憶されるべき年になるであろう。1990年代以降のグローバル経済が破綻をきたした年である。

経済のグローバリゼーションには、具体的には、二つの特徴的な側面があった。一つは金融のグローバリゼーションであり、もう一つは消費のグローバリゼーションである。金融のグローバリゼーションで、ウォールストリートは独走した。投資対象の透明化と複雑な金融工学の駆使によって、巨大金融資本は独占的に利益を上げた。あまりに自由な資本の暴走が巨額のツケを残した後、2008年11月に開催されたG20によって、大幅な規制の導入が決議され金融のグローバリゼーションは一つの時代を終えた。

消費のグローバリゼーションで先ず飛躍したのは中国だった。世界の工場としての役割を引き受けることによって、巨額の輸出黒字を獲得することに成功したのである。世界経済の発展の中で量的な消費拡大に伴う利益の獲得に成功したのである。

しかし、消費のグローバリゼーションの本番はこれからである。消費はマネーゲームと異なり、実体のある経済であり、景気が落ち着きを取り戻すにしたがって、世界各国において豊かさを楽しむ人々は「豊かな消費」の長期的拡大に寄与することになるだろう。これから、アジアをはじめとする世界各国の上層階層の質的消費欲求に応える商品やサービスを提供しうる最短距離にあるのは日本であろう。

2002年「フォーリン・ポリシー」誌でダグラス・マックレイ氏が指摘したように、アニメ、映画、音楽、建築、ファッション、食文化にいたるまで、日本の消費文化は、外国人にとって魅力的に映っている。同氏が使った「クール」という表現は日本国内でも「カッコイイ」という意味で日常言語化しつつあり、「クール・ジャパン」というキーワードも多くの人々の知るところとなっている。

「クール・ジャパン」を実証するわかりやすい事例として、2008年5月14日、競売会社サザビーズがニューヨークで開いたオークションで現代美術の旗手、村上隆氏の立体作品（フィギュア）「マイ・ロンサム・カウボーイ」が1,516万ドル（約16億円）で落札されたことが挙げられる。

「クール」の源泉は、これまで見てきたように、「日本文明」の本質にある。まさに「桜」に象徴される日本文明の優美さが、750年の冬眠の時期を経て、戦後社会で復活を遂げ、平安貴族モデルに回帰した戦後世代が、洗練された美意識で次々と新しい分野で成功を収めつつあるのである。

戦略的視点から見れば、「日本文明」の卓越性をしっかりと世界に示し、その文化の一貫性と、1000年前の平安期にピークを経験した洗練の極致を、現代において再び新たな形で挑戦して

いることを訴求し、具体的に世界に供給していくことである。

一つだけ具体例を挙げると、「コシヒカリ」「あきたこまち」といったブランド米を世界の富裕層の食卓に届けることが考えられる。高性能の日本の電気釜はもともと人気のある土産品だが、積極的に電気釜とブランド米を広め日本の生活スタイルを浸透させていくことは十分に可能と考えられる。

日本文明のファンを世界各国の上質のグループにおいて拡大し、日本への観光、旅行を増やし、ひいては、セカンドハウスの所有、さらには、定住者を増加させることが、少子化による日本文明の衰微に歯止めをかける、ひとつの有効な方策でもある。

参考文献

- ルース・ベネディクト「菊と刀 日本文化の型」(長谷川松治訳) 講談社, 2005(原著 1946)
- サミュエル・ハンチントン「文明の衝突」(鈴木主税訳) 集英社, 1998(原著 1996)
- サミュエル・ハンチントン「文明の衝突と 21 世紀の日本」(鈴木主税訳) 集英社, 2000
- Lucian W, Pye, "China: Erratic State Frustrated Society," Foreign Policy 69 (Fall 1990)
- Douglas McGray, "Japan's Gloss National Cool" Foreign Policy, 2002 May - June

